辨玉叢論

全

ホ 2
658

門 ホ加2
號 658
卷

辨玉霰論

二井高蔭

○何の頃にやもしら波ぶくるす
或人ぞ論ふいとくこと
辨云日本紀の京よりれやし人とわるやしハ
ことやしきるの頃やしきてやハよふ毎ふ辨ようあ也紀ひ
のやふハ何ぶと又ゝれしのの人とるハ百姓とあれどもゝれやの人
しゝるハ何のきふとかゝくあるるなしいるる粗忽てやまば
貴一條ようゝのとさるるこゝ波ゝ紀ゝく者ゝ本居の義の説とく
じゝむしてゝこゝいとをこゝれ
○まゝ

論云云さて後世まことしやかなる
雜云これは西行法師の作なりとかくいふ人云
といへども疑しくおもふ所なり又ト
るまやあるべきの條なるべしまくをおのづからぬるるとや

○くさ〳〵

論云まことしのまことにはなとあるふり云
雜云まことしの家とは旅しるべを万葉にあるべ
の風の云〳〵思へるやはべるべ世風とまもれる後
世の詞を用ひられるべくべく方も文とその風雅の時代
迄〳〵詞とつふとあるをとてはやなほ西行の書ハ

大方世一代集の後ふいさのこりとくとあやめく中
苔の詞ハもとより捨さるべきこころなれハおてふ旅りあくむるもく
皇恩の詞つらいの事をいくいとふと物そるふ人の家の窓
と云へるるもとも中苔とるりて八そもいとそもも一ツのわざ
の名ことるりこれとそのそもいをとる窓るれバ行るりあくむ窓
云るも源氏物語るとれ人ハ物むとあるに窓のこころ
たしとちつとまらと記の家の窓とハこそぬをやんてるもの
窓とし云ハを雅世ハ殿を方をふとけれこれかをにのり云ハ
又中古ハ家の方ハ口ハいとしてもあるべ旅をへさるあるべ又
まちふとるるたくやえびとハいるたち粗忽をやたさを成度く

ひとくはいハ〳〵すべしの定まりたる中昔よりこなたに
なるふるまひなりけるとて俗をいとで有業にとりなせ
いの道すべもいい源氏物語よハ道のりぞ仮本の道とさへ云
るとや又おのゝ序の所とるさまハさるまれも名れ
とゝ〳〵いひ川ら称しるとて論じるべいとへく古の文
章とんでうるもなきなり

○おの道業

論云〳〵

辨云古の文におのゝ道とゝかりも名ハりも書る俗も川ら
き〳〵ハおのれ業と云むと心まちてさるべきやとて
いりたちて道とゝそおのゝ道とゝかりも俗すとゝ
道と二つ有ものてもむいいよく俗るきと心まちてく俗るき
とゝもむハいとゝぐり雅文とゝもむ然俗るゝむ事をゝぐりみ俗り
書むもちハ俗ゝ部とハいちさるゝさしたの文とおのれとゝキ又
名と書るハいと方さを仕海者元ゝ古の文とあまのく
考へもてとゝ〳〵ふもハ俗ゝ物ゝ人をくゝかしあてか
かるるすと云ハりるゝ粗忽ゝや男川君ゝるすと已と云ハ近
く方ゝとゝとおゝ古ゝ集の詞書おゝふもあ也ハ海ゝ〳〵又名
云るすも古ゝ物俗るとふ文くあるるハ〳〵ふ文くれと
君ゝ記懐今〳〵りれバゝ古のゝとゝ〳〵ふありとゝ云るまゝと

今こゝにまちハ侍えしめをいとゝ多くけらゐ川か和俗をよゝ
しふまり川浜諸の里たこゝりしと浦花々河又浦花をしの
るハさぐふ之るるすしをもも他の書ふもあるるを知へし

○人の名をさしてゝ

論云し

辨云官位ゐるを人ハ氏のうもいまさぐいしれハ名をなく
外ゐるとをハ官位をの人に位なつ河の名をしふ称あるを
こをとをうぐむこ位るるすあぐむけ称を位くしを号ふ迄を位を
しけ称延を位浦ゐるをこの物をハ河のをとゐふをなくを人
て即こをてを字ををるるもの河のをくハ世人のゐるゐ知る

鎌倉殿の御名海ノ氏三郎或ハ桓武平三郎此家ノ三郎なゐの
野ゐをを知へし但しこれぐハ方書ををくさんバををいをむ
をキ物語中ををゐくををく源氏物語ふを名前ををしを人ハ
ををなしあり元く昔ハ名ゐ下ゐ者ゐぐていを人ふ射し
てをを名ををくをるるハ決しくをりしるゐを今世ゐ
人どもの中ゐををの名ををしく書くハ称ふをむしくを迄て
俗をお川ふ那ゐを人ゐをを姓ハ俗人事ぐぬハ今
ををくるハいゐるる粗忽をや元頼朝ハ恒ををの人姓をゐ
ををりて今ハ歴をの武士ゐるふをを姓ノ性ゐるぬ多し況
や平人ゐをハ百人全九十九人まく姓ハをれを知ゐを古ゐを

ちゝ百の事を言ひくさなのらさむしるくたんめりしを性を撰ひく
己うぬぐふまりてくこぶりふ川けくるめるハ〻〻〻〻〻〻い
〻〻〻〻るくかの漢字者の苗字を物く一字ゝ名ハ多ハ一字ふ
てゝとゝ称あるを古字者の作り姓ハ一向ゝ中ゝとゝ作りゝ
こハゝのついてふ方のゝゝ〻〻〻〻苗字を雅文ゝ用ふとい
かゝゝ心得ぬゝくハ姓の名れぬくいゝの俗姓と選りて書べ
しゝとゝるゝやうぶりし称苗字ハゝゝゝし鄙俗ゝてゝも訛ち
称ゝゝるのゝ多ゝく嫌ゝるゝ鄙俗ゝし婦ふ〻ゝるゝ
あふを元て苗字ゝ作ゝを俗称ゝてゝ地名ゝも物の名ゝ
既ゝゝれゝ定まりゝる名称ハゝゝゝし鄙俗ゝてゝ婦ふゝ既

○小野篁の方ゝゝゝ篁（ムラガ）有の卿（オヤ）ハゝゝの山ゝ又餓鬼旦越（ダンノツ）ゝゝ
ゝゝ又俗の名ゝしいゝる漢流ゝく字者ハ古ゝ称
文ゝハあるまゝゝさゝるゝれゝ既ゝゝその名ゝゝ多ゝゝ多ゝハ
ふゝふあゝ俗ゝふ今の学者苗字又俗名ゝゝ婦ふハ直て
古ゝゝ者ゝ名の苗字ゝ称ゝゝるゝゝ又行者ゝ行者の既ゝ称ス
るゝゝ古ゝゝあゝく古ゝ軍書又記録既ゝ外候字ハ
も交ゝ事ゝ称ゝるゝ苗字ゝ称ゝゝるゝゝ古ゝありゝゝ
ゝハ俗のいゝゝ粗忽ゝゝゝ　源氏物語ゝ入道の姫君のハ洋
ゝ方ゝゝ者ハふゝゝ方ゝ者ゝ方ゝ心得ゝゝれハ及ハゝ

○大きゝ

論云〻

辨云玉霰こけるをあぎ〻迫るハとるの人は称のかとて
たてしく始るへきなどの人とそきくハこゝろの大者〻ゝとゝ
めて迫るゝ世ゆゑなるいとるも已ゝるふとも（きをバさゝハられ
さ始んと今論者これと　大将軍家の清ゆふとりて論し
るハいふふ代清事ハかけまくとゝもゝしこれと論志の古〻
ふりふ准〻ゝ出むまハ仰と書るゝ〻さゝ云ゝるゝ芸ていさゝゝ
しをさゝ清皮磯ハ古〻ゝあ官名職名ゝあ〻ゝやゝ
まゝ清皮磯をあゝゝと外ゝとゝりゆ〻ふと云称ハあるゝ〻

○云ゝふり

論云〻

辨云神代奇ゝ云ゝるゝ〻ゝゝと云ゝるハいるのゝゝりゝと云ゝ云ゝ名川
ちゝゝるふハ邪ゝ事玉霰ゝ出ゝゝるふりゝゝくゝるゝ出ハ彼ゝゝ沢〻ゝ早
〻の討ゝ云ゝゝゝすふあゝゝも

○たがゝ

論云〻

辨云まゝ世人ゝゝゝゝゝと云ハゆなりのゝゝて大ゝゝて心ゝ花ゝゝ
かゝゝゝ云名の云と釈ゝゝるふゝゝ云ゝゝゝく釈ゝ有ゝゝ邪ゝ
ゝゝけ論ゝ川ゝゝゝる云部大人の沢ゝゝゝゝゝゝゝ作上古のゝ
ゝゝゝゝ又ゝゝ名の云ゝゝハゝゝる記ゝゝく毒く辨ゝゝゝゝれハゝゝハし

おさんにさくとの来したりて、味のあるなどいふを任
忠のすしで田舎といふ事をもてなれあるとゝ云へる決し
てなり。拙と御ふ任忠のすの外にはあるのすゝ云へさるもと
なりれハそしいハゆの高しき粗忽と云へさるなるとうとむ古
きあ伝しとふ田舎のすそぶ多きハとや近く伊勢物語に
しめかたうてしひとをあるを田りむし漢民物語に
あるゆよひを思ひけるハそなるもなるとやうくのあくを月
のおとあるをと考へ合くくさまつせくこと
云ハ行しるやたのそく任忠をしめすとハ皆のなりとこと
云れあるとしるる決しくあるる那し次と者とかうとあて

下のとゆくの異をそく部をぬぶハ或ハあるとゝ云ふ
ひがとゝ今うとゝを拙の外とハ俗あとあるとゝ云はかる
行そたくゝ肖こくあるとゝ云へさて又忠所を法めるとふの
坂下をそる那なるとゝ云るも漢流と皇忠まハ今ゝとてもそ
をハらやこと云ハ云ゝ又今世を古へゝ派へくあるとゝ云へさあハ
代なの掌り作めらゝ處又大名の下ゝてとそ思ゝの役人地
掌るゝ云るどとハゝれ代友又役人のゝ人らゝ云ゝさハあるゝ
ゝも云へさふや拙ゝとも拙延ゝ武家ゝのけぢめあるくの
拙延の名用ゝ派ゝくハゝゝでさるゝも名ゝハまゝ川と世ゝ
ハあるとゝ云へさゝふかくゝ今世ゝゝゝ田舎ハゝゝである

と云ふ何のうあらん況(やも)何もいろぬるく拙(せつ)ハ凡て此條
の論ハ世間のいろ〳〵問らるゝことゝ〳〵
○何ゝ

論云し

辯云まるびの窓云のそれをるゞハ中昔より云る仏名れば
何でふゝとあるむけあ〳〵ふハ近世人の漢称詞もいとうさ
ゝうゝれバゆるゝべきなりゝ
○まん

論云し

辯云まゝもゝふゝも逆〳〵云べし言と決〳〵よゝゝハ云ま

き言ゝのゝぢめあるをゝまざるハいるゝ此論ハ仏書ハいそ
ゆゝ通と知く別とゝてゝさるゝ古詞ハ詔ふをのゝまを
申〳〵ふ申〳〵ゝまゝをゝと云るゝハ決〳〵この差ぶたゝ〳〵
とゝく〳〵の言ふゝるゝまゝと云ハ近ゝゝの古ゝを志のゝゝゝと
○ゝ〳〵ゝゝ文の詞

論云し

辯云い〳〵ゝのつゝひざまのゝ此論ハこれを照いたゝ〳〵と
思へゝふハ志あゝれのゝまゝとゝるねねおゝゝるぬいぶゝゝるゝるゝハ
ゝ非ゝおゝハゝと凡の義く かゝゝじけゝるゝのゝゝハ此論まゝと
ゝゝるゝく凡ゝくゝ角のゝハ者ゝゝゝゝとゝゝゝ仏ゝく者の

仮名書きする世態なり但し世にあまねくもてはやされたる
しれものは什吉の男しやもの雅俗とさまへたしなむ今
世の俗語にて云ふこと雅文に書くことをゆるされるべ

又の或人の論

○発端の詞

辯云論文本末のめりたしてかしこ下四段をとりとり
申べき者なるものゝ心とりもせしこの論は君翁の表と大に違ひて
表裏なり玉家はさて古人の伝と違ひいふる近世の説なりとも

さとされるふしもあるところともておしはかるべきいづく
ふりあるを他しことをもて考へて書るは論者の文のつゝ
くゝく云べき詞とはなさるゝの言とはなしられば此のゝ深くとゝむ
べきふしとあべきさまとも人のまを深論とふことをもの法
ことのさまなるまあるべきは言葉遣ひなどもあらんを試ふいとこゝを
しでかしるとこゝとまりふおしとぶむるものゝ心を入しとゝ
とあべきは叶ふべきこと又玉あべきは古今文の大ものゝ一ひと
とべきるべきのまと云る書ふはあらじ

○ゝつゝらある古雅なる文のむげふつるこゝとまれ

辯云吾翁の古文は天下の人れゝ知れるところなるとる雅せ

もとをくハ節〳〵やうとあるべくさにもげかつてかれ〳〵いひ或ハ
あまりさかしらをさかしるどハあまりすぎ過言もまた
已り妬忌のかたあるふうあるくるる大言と云ほどの人なれと
こゝろのくるの文ハつるふとてくれあるべきるるふけ海の文とえ
るふ凡そ文の体とはるる人なるべいどくとの中ふ一門とあ
ぱく云む此の何の姫つるふ人ぬまどひとさとさどやくしとる
とそる歩とる人ハ何るまどやこてあるこハ土佐日記ふ女もしくるむ
とくとそるれまとあるとを思ひてちるるべくれど彼ハ上ふ男記と
云〳〵あまハそれと持く日記とそるるとく抜るこての文ハ上
ふ持ものとるくるふとそるこハ何とそるふり四段を傍しいはげい

ろひとくとあるハ論ふと云る用言なるとハ云べく
を也論ふと云るを作言ふふくさハその海とそるこ抜るれ
と用言ふ云へ止ハ叶くそどこれりくるあるふ尾口のあくれ文とちる
くるくへの漢文とこどうりつたるくと云ハるふ抜いくそ云とさ
ばやくくと云るもどやの何の用いざまとてどるものこれいさ
くさもくくさを云べくれもやくくとハいりぬるるとや

○漢も文も古へのをバ云

論云

雑云むるくまの者場の文ハでや言の言葉とのべられるまん
それ何とそるれるくるるの言のさくるやとくさともの

こゝに此うたの詞書にあるごとくハ詞の詞へうゝ
と海とゝ〳〵とゝ上かゝゞゞ此うたの詞書にあるとゝ詞へのゝ
をゝゝ文の全篇此海とゝゝゝゝゝゝとのゝ

○ふぐりにいふふゝゝゝゝゝゝ

を而こそ書るふて そハとそ 海ゝとそ とつでゝるふ 今こゝ四一
ゆるるハいらふ 篇の文ま ふとそとるゝと 己ゝるゝたゝで人
ぬゝ人ゝと ゝ ゝ ゝ

雜云何なるもあるべしこゝにてつゞきと紙しらハふるさ
紙文とたてさらハ伝言へ元くかゝるたの細のつけハとゝ云べき
云とゝ下ふとゝ下に云べきゝ云とゝ上ふとゝその詞ゝ上ハくゝ
てゝと云て紙文の表形ハ海石のつゝみゝ詞ハ紙らハ
ゆくてつゝくゆゆゝとの詞ハいとゝ上ハとゝ下ハとゝ云しこ
ハ上へとゝ下へとゝもくきく何事ゝとの上ハゆきてゝといやしき
つゝとふの上ハあきてゝと云ハ詞ハるゝとゝ文ハけゝと詞こ
ゆくゝつゝきゝしゝいつゝふゝおゝとゝくゝわゝゆゝ詞るゝゝ
あるべきゝとゝゝゝゝ凡ゝ文の報製とゝゝきまゝ詞ゝ海くゝり
ゆゝの文ゝとゝゝ花やゝふゝ一ゝあゝゆゝゝゝふゝあゝるゆゝゝ

作ハ遠く紙ゝ書ゝ
○ゝしゝあゝりの句

海 云ゝ

雜云まゝとふゝの何ハ程ゝ云ゝ詞ゝあゝ花ゝゆゝ
あゝゝゝゝゝ作ゝゝゝゝゝ

る神の用ふるいく世をもとて三日でら和歌をぐらしく
洞ワろ　さく神の萩原をいろ〳〵ぐさ　おのゝ流こそれ
らとあゆ〳〵お入べとも花もなくうめぬ世上ものゝ粗忽さ
ハあしもじいとじ　あとしなな句の改こそたるらふハ
ゆゝるれハ世俗ふハあゝ仏前ゝ歌の定ゝれさ
るハあゝ〳〵おのもじ句の半ゝあるゝ年世ゝ〳〵ゝ
とたゝふひとゝべしゝもあゝぬるゝまゝ古今集
おとゝ〳〵ゆまつの句あるゝおゝゝ二ゝ八十そゝゝあゝゝ
〳〵くゝゝにあゝ〳〵おのもゝはけゝ字ゝくゝあゝゝるハ
一ゝゝあゝるゝゝゝゝゝ者歌の伝の動句ゝ歌和

べ〳〵後撰拾遺ゝもはしゝるゝ世撰ゝゝゝゝ
ゝたゝゝふゝゝくハたゝべゝ　又日ゝゝしの留ゝ人ゝゝ

補ゝ

雑云ゝ思ふハ山のゝゝとゝゝを四の句へつゝゝるゝと撰ゝゝ
云ハ俗の粗忽ゝ日しゝた今集の句ゝ引めれゝ十ゝゝゝ
ゝ思ゝ思ゝゝゝれゝんゝ思ふ心のつゝゝゝ分ハし
ゝ思ゝ撰ゝゝゝゝゝ

きのふとゞあまりの句あり むすびゝて右の三首をこゝの日記
のごとし 日数ふてとゝもゞハら郷次の句の詞に屬るものなり
此ものゝとゞとを句の詞とするまとゝゞと思ふハ浅世人浅く
とゝと上るる句へつけくらみるゝ〳〵るゞ癖なるものてそ也
再るれる有へ 此してゝハふるる書ざまなるやゝ
癖云おりたとハ女しさをもてるを書ざまふハあれど又無記
半しゝるゝ句とハまゝてふ庵曲の詩海のきり
なくあるふあるひとゝれるるれしよあゝれと此りとし
侍の上ふゝ詞を有くゝ分のゝ〳〵よゝもしもさのゝ雖をゝさる
もゝりとゝ有ゝふかゝしの詞のゝざまゝくゝを雖ゝハ句り

調へとゝるもゝ侍ゝつゝゝゝゝ句のゝ人よハゝりハとさ
をさいゝゝりゝしるゝりをゝ呂郎大人るゝとゝ如ゝゝくつゝよ
ゝゝりとゝ文ゝとゝれゝ有ふゝゝて雖ゝゝゝゝれゝゝ
侍ゝ義ゝゝふ逆ゝゝいゝさのゝゝゝむゝゝさゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝりゝゝゝ詞ハ大祝ノ詞ゝとゝりゝあやまりゝむゝし
拾遺集ゝゝふハ大京歌ゝのつゝゝゝれつゝゝりゝしゝふゝゝハ
源氏物語ゝ物かゝしゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へゝゝあいゝゝおの詞ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆくえ見ずハ山のこなたハ秋なれ風さへいとすごうし
のゝめ〳〵されば己れの私ととてゝ古の例をとり考へく物
するに古の例を遠ひらくハ己れ心をうゝ思ひよるまき
こゝろをふかくハあらじ古の例を思ひしることを定むべきなり
也たゞ歌ハ上ハ古の例とゝ学のひがことをさとされ
る事〳〵　古の人の歌ともむかしハ詠ひおのゝとゝ
ハ云ふ思ひ出むまのうへさま
雑ここハいとゝ古る例ハ心成用ひさるべき
考へされども世様とゝ変るさハ自然のすゝ法
世人ハその自然の例をとり学ぶ古の

自然の様とハくさ〳〵ゝ変るをゝ例ハ古へハ例をつゞ
けの法式とゝ定るなれバ古人ハ世風ハ世例をとり考へさり
世例をハ遠へ考へるべく考へ用ひく物を書くるハ
ゝ考へ用ひ物とゝ一切も例をの遠へるをゝ古ハ自然の定
まり行るべかれ世ハ今世もしであまりの定すゝも
古ハゝ法なれバ古ゝ例をづくりとゝ古ハ
ゝ法とゝ定るまりしハ己れの例を定めく古の例をを
ゝ考へるまゝきゝやいかゝ
○さとびその学ゝ流れ

御ゝく

辨云さてじしふ流れと云ふ事は今俗云ふる所なり
今の世まてと云の仮書るしるしてとさとふ今俗云ふ書く
者りるなれはさしてしく遠てしてしてのみりと云義
は祇園るるるはのつしいざ毎つけさまるるの俗云のさまる
と云しりの俗長文の所之同ふ云しるるるるるるの
部と云さしてと云みりと同しるるの意ること我云つとく
頑愚くはさとじ云とは俗云みのとは云俗云の用はるるると
ひとんはるるるはんとと人俗云ふ風流(ふうりう)云とは云人と指く云なり
風流(ふうりう)云の事と云は云人のとでさふるるとと云同じるる
意るとはとと人のとでさふるるとさてるるあび

論云

○二川のとしてしてしてとあるとふとふ胡椒
辨云二川のとしてしてせいつとふてとあるとふとふ胡椒
やるのるるるるるの粗き料者るるはは文はるるるのあるはち
泡の河水と共数をいとはやるるるはあるるるるるるる
河河とまるふあるるるるるるるるるこれ漢文ありと為はて
むこのるりと思へる河河凡く書の其ノ泡共平号るるはは
國也ことと河はるふはあるるるるるるはは出言のみのを
用いむこと事とるるめるはは庭出のるるとるとると

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

論[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

論[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大人のつけられる書のえの事と指くとうとゝ思ふる
事なれとハあらはしもし世ゝの人ゝ考るなの紙に記ふるかり
すゝ〳〵これゝ〳〵ゝゝとゝ思へ名れ

○かいつけて

論 云

辨云 此論 玉葉と云ふ物ハ人
〻ゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ
〻ゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ

○きこゑ

論 云

辨云 ゝゝまゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ
書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ書くゝ
ゝゝゝ

ものとしてみるに、二所出されたる二所共に皆世間にこめてあるものを、
ふるくなるまでもつたへたる歌世にあれば海人のたくひまれなるものとや
小世話なるものとや　ゆゑ〻しきすがた文に侍りけるを
文の体さまざまにこそ〻べ〻とは海人の心ばせ分別文詞とを二所
に、やさしくかなしく通はしてかく文ふとこそ〻べ〻と思へるれどもゆゑ〻
とをもるる所あるは其下に侍る文こそ二つにわかるるなれ
つりふねのかがりふる分別文詞のなげかはしくもしく
文の体さまざまゆゑ〻しき人の文とは行とゝかゝるるを
さこそやたくふかるるとたくいと邪なるを見て外ふ
こそ〻べ〻き詞なるてやむるはめるとそゆゑんとそ〻べ〻もあるべ

くれたる文の体のまゝふるゝ〻しきとく物なるふるれとは物てるさ
と体とるるさゆゑ〻とはいふとそ文とをひとくにあり〻て是人の
耳を驚かさむとそ〻べ〻る古歌なるのくせ　分別とをるを海
〻るる中ふ信濃とのゝ詩体とこそ〻べ〻るは生〻て旅ふ
小詞ふ好〻用ひて文ふは用ひめ沖ありられいふふ世間のす
るるとこそ〻べ〻のつ〻〻口にて　さく分別文詞とは上古と
已ニ〻ふ〻ふ〻ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やわらぎの「たくやくこと」とよめるの「と」又「やと」のるふこと
あり也

○たりく

論ニ云

辯ニ世條の論とべくの論ハ是ハ行まことふさるもの
此也ことも漢文の例ニすべくふとこふるべくハ此りてを
やるしりくしきとしとくるふ異ニ云ことてとこれ
ようてとこもしニ行るようあるむりし文字のをもくようう
つれる須ニし又上るる二所のとしニ三ツめとしニ條の論中
ふあるしいるき宝ニてのまことたどしよれ意旨の論ニなし

てはるべくし又古人のいひすぐしハ未ぬふ論ハ出ふしく
はしひしくあるむしてあるやうる也ことこれとの論のこすハ
義の宗法ニの宗ニる義ハ存のこの宗の道ニもはるく宗
旨法門しく古人のこするまふはしてあるむしてあるや
うるへき論の笠ニの論ふこれる須ニもめるふ問心し
て笠ニめしの宗れるハ宗ニのしるり知ることるふふ
弘王法燈（ヒロオウホウトウ）ニ云ハ殊ニるる問ニ宗ニ法ハてはるむ有
の宗の宗ニの宗法道ニハ中ふとつるるぬ問ニると法
てどりめるるるこ已ぬ論千ふ法ニ上まるるく宗ニ論のこて
るこてとりしれこの宗ニの宗法ニるこハ中ニハ重の風

の名文をかきつらねと嘆かまほしき詞ども死ノ王ハ佛足石の歌ま
あまたどもかかれたれども用ゐ給ふ法ノ燈ハ元ハ
しき漢文なれども中古以後の風の名ハゆゑ(名詞)
うれ〳〵詞よりてそうらふべきぞ

○時代のみち始めぶし

論

雜文書川古の言語の変ぜしけちめを云むとナリ変語
こと〳〵く古と語とぶちるものとあらば神代より今
まで〳〵はし詞もあり　又中ハ古と語と大ゆ異ゆ
て決しく深ぶかまじきもまれハ世俗ノ語の詞とあや

まつくたゞ世ぶとふ名をハてハそぐ〳〵叶ふまじ
もまつ〳〵後世ふハ古ゆ〳〵ハいひとりかさるもの
多りれバこふりく中古の詞又今世俗称なと我もすく
さるものとなるもあるハ和漢さ迄ハ玉霰ふりこれるハ
さる歌ものく〳〵非ことふハあらぶ世ぶ古ゆ〳〵
をゝ古ゆゝて〳〵叶いあ後世の詞をまつ
まづ〳〵世俗ものとへ〳〵又本ノ作をつくるわくゆる我これ
ふるこさく世俗をもつ器部大人の文を思ひくこれるわく
ふ後〳〵これども世俗ハ未熟の歌の文ノ近ゆ混雜ゆる
のゆゑをこゝされくるものふ〳〵器部大人の文を思ひくふハ

あるに但し他の作くるハかの大人の文ハ世にくれるるも
ものなるべくしてその文ハ世にあまねくハ是ハ大人
ハ今の世にくたくみなる文をもつくるるもと
始められるるなれども大才大知みてくまでふ
古学の説ハ始めのうちの深き始めのうちなる事
しるべきなるべくまた文ハ世にるるもあるべしてあるべく
たくさん遠くるべきなるべくこと学ばるべきこと
うるべくハ大業ハつくるべくふ教人のる我ハくこと全くふ
あり作るべくさるべきれ神のうちで一人のかうも全くぬ
作るべくふるべくに我ることハ大人ハ教ふるべくしさ上加ふべ

きしるべくと思ふいるなハたふ事しるべくひてそのいるる
ひるるとはるべくるべくそハまた彼大人の文大ふ癖あり
さてひくたびとつるもくこと古言の中ふと殊ふ事をくはや
しくふ我ハえひい用ひ武ハ上ひくく作くるとあるべもし
く漢文みるる流とこるる得るもまくく或ハ異くまくこと
異くふる遠くくたるのみるる遠ハ殊る又てふをたのくるのハ
さるる河のつるひさまの遠ハるる又異ひの外さつくるる河
つるひるるるれるるるる我離れ
てさひくたるるるもくこと我ひるるる人
その事さるるるをハ始るさまくくくくるるるるその河の殊ひつる

げてこれをつのるものは古人のいましめにゆるさ
れず。されどまことに古文にうがちこえて異
をたてしるすものは世上にあまねく
ひろまりて古文の空りのむくるれふはいと欲ふべきもの
なれども古人此教を受るがゆゑにその失をあら
はしこれをいましめ給へりしかれども今世人その非を
ものがたりてこれをひろめ行ふ心ありて
もくそをもて欲ふべしさふれば師の説を
えらびこれを罪せんがごとき已の罪とのがれむる歟

のゝ異ひとそのたのしみとなるのみ者しかはねどもこれを罪
とおもふ者しかるにそのたの作りをもむ
ものとなしてこれをすてんとするもふかさうとしてふ
ふ今世俗の云説大人の文を用ひてこれをふれとなす
ものはこれをうるさしとおもふ人多しかれども
古文のこれをふかくこれをもてあそぶものを惑へるもの
なりてこれをのがれんとしてこれをもてあそぶ
とこれをさへなすもの者多しかれども
ら者多のこれを文をもつてこれをやしなふとこれをいへ
ものいくらかあるべしもあるべ

なる定言ハ作りなれと信どるものあるもあるべし世人ハ学ぶ
ふるさとをとうとぶとあるまゝ書籍の字文のごと
きをもてとりてのみ知とおもふかるゝ
あれ言まゝ　古の詞のこゝ様あ用めるゝこと
古の歌と響とゝ　たゞのとゝ響と様知く
こゝはあるの海皆さるゆゝ知れるゆゝ也ハもと
ゝ響ゝ詞文のとゝの作りかゝ姿響るゆゝを教
へるゝふゝあるこゝ詞とゝとしるゝこゝ
あれ海をゝづりも　えぶりふ古の詞と後の詞とをゝ
（用るゝはゝ本ゝ世ゝをつゞゝんゝゝとゝゝ）と云又

詞のえゝいゝるゝゝゝ

あまぎ河の近たのちちめ又そのつひさまるのそくとい
ぶくとはぬたのまゝそをとゞめるもふしくそこゞ色
ようこで海路とのらもとをもいそはぬもがそのこ
川をつゞ[illegible]されバ神なの人をの文をとるもしるべ
たくのとゞこし路をとくゝ考ふべ注をらそびめの仕事と
ふりるくをくをとりもしすゞを立ちの何とうくさす
その事ひさ風とくゝ考ふべくさく全篇のとくこ路ひ
るくらこれをくゝはくく後の事なるさくくその海路ふも
ちと偽とあくくまくそこの海路をはるのいとくくし
今の世の人のくをくの文の海路ハこそ偽といこそ文を疑

きむとくく注くたゞびをつけ人は事をゐどろさもこあふこと
こそ事なれぬ何を事ひたの偽ふ遠ひく何をあやくく
つくいたくるくとるこれこ新偽ふくくこ今の人のたく文ハ路
これこと何海あとけ偽をくくたく文の海路をとはるるや
まをひくくたの海路をハつやくくてさるもくくるこそ
るのひんたやもくくるのよくるやくくるをはくる路あり海は
くくハをを清水手穂よくくくくふハ何のをくても路
ひとたくくやくふくあるる文をを路をるくくてくさ文
いたるのるくくや
○我義は二篇の海をくくれりるハけ二ツ異人の作るふ

文の口つきのごとく例るハ男女共に用ゆ海ハとし文めい
し抜ちしふりなく活ちるとハ海を主る人の多くせし
いるるやあらもこ一ツ上ちるれるとこそ考へるとこそ
いりあらむ
又此論者文章の事を功有じしくそなると此海の文ハ
ちるふりる義ちゆんのこめる女と示しこそ
つこそ義の示されるやうたのめし
終の條 けい海ハ賀義義のとちち 上ちはるもとそひこそ
詔おまりあるし抜し別こそ一ハ言ハ文ハ おしてこそ
しこそあるべれ 六行 たのとそるの文をくふハ 道ハ たのそ

かくこふりるむふてこそくハこそ上上阪ふ文とこそあハしあ
るこそ又文と言ふ文とこそくハこそ抜し又下ふつくるべこそ
あるふ合でくこそハ必ずもこハしこそでハ上下のつりあひふ
叶 十行 たの文と今の文と 此海こそけらるるく別こそ
こそこりるこそあとこそ塔をこふくこそけこそはハとつこそく
らくこそゆるこそふとこふ辞ハ必あるべこそ 十二行ノ こそく
えこそびこそくこそ此事こそ別こそ一向叶ハぬ
こりこそ決しこそこそ文こそ市こそこりこそハ仙しこそこそ
くこそこそ文べこそ 又西しハ ある べしこそこそ文べれ
十六行 いりくこそたのりの文こそ西べこそや これハいくくハこそりの文

[illegible]

所よりの「又」とは[illegible]

又ともめのやもじ上の詞[illegible]

みしとゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又古の詞のゝ　上より脱よりの詞のゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て考へ知るべし凡そ物をするハ多くさとれと全篇されかし
ふるゝ世とりうの今世にぶる文らく世人今大ろこゝる
世位の世ゝこれをとゝ世ゝ人ハ浦山ふかしとそこれ
りゝる
○ろぐはし学のなゆる稲掛大乎り世海をろくゝ云くは海石
音義の字文をさむくふそ字ハそ字ろれども言川ろ
半る世文をろくゝまりのろゝの人の文とハちがひく近世の
ろろゝ癖しなゝ又古学者の癖もをゝ〳〵あゝさハまさし
く良京一粒の玉数九のゝ〳〵まろゝ〳〵るゆ験いちゝるく
ろゝくめぐゝ〳〵